

## Qu'étaient Robinson et Vendredi pour Jean-Jacques Rousseau?

Hisashi Suématsu

Terroriste dans les lettres, tout en déclarant : « Je hais les livres; ils n'apprennent qu'à parler de ce qu'on ne sait pas. » (*Emile*, 1762, Livre III), Rousseau approuve cependant comme un « excellent livre » *Robinson Crusôé* de Daniel Defoe (1719) et le recommande à son jeune élève imaginaire. Cette contradiction flagrante nous incite à nous demander ce que représentait le héros du célèbre roman anglais pour Rousseau, par rapport au système anthropologique qu'il a élaboré, pour l'essentiel, dans son *Discours sur l'Inégalité* (1755).

La manière dont il parle de ce roman n'en est pas moins surprenante : non seulement il ne retient qu'un seul aspect de ces nombreuses « Strange Surprizing Adventures », comme l'auteur intitule le roman, mais encore en fausse-t-il l'histoire. Il écrit en effet : « Robinson Crusôé dans son isle, seul, dépourvu de l'assistance de ses semblables et des instrumens de tous les arts, pourvoyant cependant à sa subsistance... », alors que Robinson n'est seul, comme ne l'ignore aucun lecteur de Defoe, que pendant la première moitié de son séjour, et que, chose plus déroutante, il récupère du bateau échoué, aliments, boissons, objets et toutes sortes d'instruments (tools), y compris des armes, et cela dès le lendemain même de son abordage inespéré.

Cette étrange faute de lecture (inconsciente?) ne manque pas de nous apprendre ce qu'elle retient et ce qu'elle rejette des données qui organisent l'histoire de la vie du héros; d'un côté l'image de l'homme de nature (isolé et sans aucun « instrument des arts ») et de l'autre celle de l'homme de société (dépendant directement des autres hommes et aussi indirectement à travers les objets de la civilisation). Parmi ces données, il est encore la foi chrétienne, qui, d'abord latente chez le héros, devient fervente par degré pour finir par étayer éminemment sa « félicité ». Rousseau n'en dit mot pourtant, comme s'il voulait laisser entendre, *per omissione*, que cet Anglais était aussi « dépourvu » des révélations.

Par ailleurs, Rousseau fait une fois mention de Vendredi en parlant d'Émile : « Au reste, dépêchons-nous de l'établir dans cette isle tandis qu'il y borne sa félicité, car le jour approche où s'il y veut vivre encore il n'y voudra plus vivre seul, et où *Vendredi* qui maintenant ne le touche guères ne lui suffira pas longtemps. » Bien que succinct, c'est une phrase essentielle qui annonce de façon symbolique l'altération imminente d'un âge heureux, moment critique dans la structure du système de Rousseau, où l'homme, en tant qu'espèce ou en tant qu'individu, voudrait ou aurait voulu s'arrêter.

Voilà ce que nous allons essayer de démontrer dans cet essai.

(Hisashi Suématsu, professeur émérite de l'Université du Kyushu)

P.S. Dans ce volume 20, nous publions la seconde et dernière moitié de l'article.

# ルソーにとってロビンソンおよび 金曜日とは何であったか（2）

末 松 壽

## 主従の関係<sup>43)</sup>

### 1. 契機としての金曜日

もちろんルソーは「フライデイ」なる綽名(?)で知られる存在のことを忘れては決してない。ただその出現を記述する仕方はきわめて独特である。それは素早くさり気ない。しかも一度かぎりの言及である。けれども、そのテキストを見る手始めに、著者であり語り手であり教師という身分の登場人物でもある「私」—論説と物語(小説)とが混成した自伝形式を特徴づける事態—が、エミルにロビンソンへの同一化を要請するじつは奇妙な文章を見ておくのが適当であろう。曰く、

彼には、無我夢中になって絶えず自分の城砦や山羊たちや作物類のことに没頭し、こういう場合に知らなければならないすべてのことを、書物ではなく事物によって詳細に学んでほしい。彼には自分をロビンソンその人であると、毛皮を着て大きな被り物や長大な剣を身につけ、そのグロテスクな装いを完全にまとっている姿で思い描いてほしい。日傘だけは別で、これは必要あるまい<sup>44)</sup>。

議論を続ける前に、このテキストには読解の問題があることを指摘しなければならない。最後の節: « Je veux ... qu'il se voye habillé de peaux, portant un grand bonnet, un grand sabre, tout le grotesque équipage de la figure, au parasol près dont il n'aura pas besoin. » における « figure » を、注釈 11) で参照した和訳書は、「主人公」と訳出する一書を例外としてすべて「挿絵」と置き換えている。「挿絵に見るような...」といった類の訳文である。いずれにも問題があると筆者には思われる。なるほど『ロビンソン』の『エミル』公刊に先立つ仏訳本には、(図版なしの本もあるが)その「口絵」(frontispice) —「扉」とも訳されるが、「挿絵」とは呼べない—に、一見ルソーの文に対応するがごとき版画 (gravure)

を掲げているものはある。さらには何枚かの図版（まさしく挿絵）を本文の頁と頁との間に入れた版もある。そのことはしかし上記文章における語の「挿絵」なる訳を正確とする理由にはならない。そもそもルソーの見た版が定かではないのに、訳者たちは、彼が挿絵入り本で読んだと決定することなどできるだろうか。

他方『エミル』における描写は口絵をみなければ書けない文章でもなく、記憶を介して少なくとも『ロビンソン』の文字テキストに由来することが十分に可能なのであり<sup>45)</sup>、それに、『エミル』のこの箇所の読みがいささか難しいことは事実だとしても、文章はまず文章として—ここではおそらく一種の「語感」にもとづいて—読み解くべきであろう。この時代、語の「挿絵」という意味での用法は皆無ではないにせよ、たいして頻繁ではなかったことの知識も一助となりうる。じっさい«figure»のとりうる「挿絵」なる意味は『リットレ・ポージャン』（1958）にはまったく記載されず、『ロベール』では«moderne»（近現代）の用法だと説明されているのである<sup>46)</sup>。尤もルソー自身に、「口絵」をそしてもしかしたら「挿絵」をも包括する種概念として用いたかと見える«figure»の用例があることを認めなければならない。それは他ならぬ『エミル』のまさしく「口絵」、それに加えて第二巻から第五巻それぞれの劈頭を飾る一ゆえにそれらは挿絵ではなく一種の「扉」とも見なし得る—図像で、いずれも等しくギリシア神話の人物を象っている<sup>47)</sup>。ともかくしかし著者がもし図版への参照を指示するのであれば、もっと明確に«comme on le voit dans le frontispice...»とか«tel qu'on le voit...»のような表現をもちいたのではないだろうか。

本題にむかう。デフォーの作品は、「本を憎む」というルソーが例外的に勧める本であること、ロビンソンへの同一化は、ビュルジュランが説明するように「我々を我々自身から引き離すのではなく、かえって我々自身にもどすのであり、この他者化（aliénation）は（...）真の知恵となる」<sup>48)</sup>ことを、一世紀後に出現する語を用いていわば「ボヴァリスム」の善用として認めるとしても、それでも、テキストの勧める事柄の異様さには驚かざるを得ない。もし実際、ロビンソンを読んでこれに同一化するとしたらどうなるのか。エミルはその限りで「書物ではなく事物によって詳細に学ぶ」ことなどできるだろうか。逆に「書物ではなく」文字どおり城砦を作り、山羊を飼い、作物を育てることに従事するならば、人のおかれた当の状況を構成するあらゆる事物・事実は、それらの位置する空間および時期や時刻の特個性とともに、場合によってはあ

る程度の偶然による符合が絶対にあり得ない訳ではないにせよ、テキスト内での言及、指示、描写、説明、要するに作者による諸々の決定とは無関係にあれこれであって他様ではあり得ないのであるからして、それらに対処する彼の生活はロビンソンの生活の仕方からは完全に逸脱し無縁のものとならざるを得なくなる。その限りで書物のロビンソンから離れることは必定である。日傘を例外とする時、著者自身そのことを事実的に認めない訳にはいかないのである。

作者が同時的なものとして表明する二重の願望ないし忠告は、現実と想像、事物と文学とのあいだの断絶、根本的には記号の恣意性に起因するアポリアに導かずにはおかないと思われる。ロビンソンを模範としてこれに忠実に生きようとするれば、ロビンソンとは作品内存在であるからして作品に埋没するほかはなく、こうして事物に触れることはできず、逆に事物に学ぼうとするならば、事物の側の要請に対応しつつ事物に即して生きざるを得ず、こうしてロビンソンであることもこれになることも、作品と事物世界との二元性を無化するかと想像される「不純に」隠喩的な意味、あるいは言霊信仰においてならともかく、絶対に不可能だからである。

ともあれ、この重複した意味では両立不可能な同一化の忠告に従って、エミルが島の生活を有頂天になって生きるという記述の中で金曜日のことは言及されるのである。その出現は、一度到来したならば、それによって物事は必然的に転回せざるを得ない動きのなかで、それ自体瞬く間に去りゆくひとつのモメント（瞬間＝契機）としてしめされる。すなわち、ロビンソンの生活と同様にエミルの生活にとって、ひいては、すぐに見るように人類の歩みにとっての決定的な瞬間としてである。ルソーはこう書いている。

彼 [エミル] はあらゆる有益なものを知りたがり、それしか知りたがらないでしょう。もはや彼を導くことなど必要ではなく、彼を引きとめることだけが必要なのです。ともかく、彼が自分の至福はこの島にしかないとしている間に、急いで彼をそこに住ませましょう。というのも、彼がまだそこで生活したがるとしても、もはや一人では生活したくなくて、今のところはあまり彼に関わりをもたない「金曜日」が、彼をいつまでも満足させなくなる日が近づいているのですから<sup>49)</sup>。

これはひとつの類まれな時間と空間を提示する注目すべき件である。それは「*félicité*」（至福）の時である。回顧的にいえば、先に問うた「*bien-être*」の意味がどうであれ、少なくともここでルソーは、ロビンソンが単に物質的な充足

感に還元されない十全な幸福のうちにあり得たことを明言しているのである。少年は他ならぬその時をその場所で (illic et tunc) 「生活したい」。だがその時は儂い。古典時代の用法で « climat » なる語のしめす気候変化を有する地帯においてすべての季節が過ぎりまた巡りくるという意味で、例えばあの「あはれ今年の秋も往ぬめり」の感慨ではなく、それは人間的で「観念的な」という限定のつく歴史的な意味において唯一の独特のしかし儂い時期であって、それが始まるや否やすでに終わろうとしているのである。というのも金曜日存在は別の事態が出現する前兆でもあり契機でもあるからである。人が他人の最中で他人とともに生活せざるを得なくなり、私自身がまた (ラムポーを援用すれば) 「他者」となってしまうざるを得ない、まさに自己喪失、知恵とは逆の意味での疎外 (aliénation) の状況が出来しようとしているのである。その時にはもはや「至福」は失われ、それどころか人はそこで「生活したい」などと望むこともない。それゆえルソーは、せめて今のうちに「急いで彼をそこに住まわせよう」と思いやるのである。

ちなみにこれは、エミルには、成年まで生き続けて行くことができるという保証はないのであるから、今を十分に幸せに生きる権利がある、彼に今を喜ぶ至福の内に生活させたい、教育の美名のもとにこれを壊してはならないとする教師の願いを連想させる。

たとえ運命の大鎌が、とルソーは書いている。彼において私たちの希望の花を刈りとりってしまうとしても、私たちは彼の生と死とを同時に嘆くべきではないのです。私たちが彼にかけたかもしれない苦しみを思いだして自分らの苦しみをかき立ててはなりません。自分自身にこう言うのです。少なくとも彼はその幼年期を満喫した、自然が彼に与えていたものを、私たちは彼をしていささかも失くさせることはしなかった、と<sup>50</sup>。

自明の理にもとづいて読者は、著者ととも二ヶ条の実践的なマクシムを引き出すことができるのではないだろうか。一つは、大人は子供の幸せを害してはならぬという教育の原則であり、もう一つは、その限りにおいてなら成人した人はいつ死んでもよいと覚悟した生の勧めである。

ところで、孤立した自然的な生から社会的な生への進展のプロセスを予告する上記第三巻のテキストには、かなり手のこんだ技巧、一種の比例関係にもとづく語の転用がなされている。概念の関係は、次の図表で表すことができる。

---

	想像世界：	ロビンソン——金曜日——	>人間たち
想像世界	{	-----	
	現実世界：	エミル——X——	>人間たち

---

現実世界

作者、読者

これはアリストテレスのいわゆる「類比によるメタポラ」の利用に他ならない。『詩学』はこの種の転義の例の一つとして、エムペドクレスが用いたという次の表現を挙げている。すなわち、一日における「暁」の「黄昏」に対するは、人生における「幼年」の「老年」に対するに等しいというアナロギアにもとづいて、「人生の黄昏」と言うような場合である<sup>51</sup>。ただ、詩学者の挙げるいくつかの例との違いがあるとすれば、ルソーの場合は虚構の、というのも登場人物にすぎないエミルにおける同じく虚構のロビンソンとの類比であり、同時にそれは構造的に複数レベルにまたがるという点にある。現実の読者にとってはいずれも架空の人物という同等の存在性をもつロビンソンとエミルとは、想像世界においては類比的に現実 vs 想像という対比によって特徴づけられる。エミルにとってロビンソンは、自分自身とは異なり架空の存在にすぎないのである。そしてこのレベルの差異を無化する同一化（虚構の人物エミルは同じく虚構の人物ロビンソンに成りかわる）、あるいはむしろ読者の立場からしていずれも等しく虚構にすぎないものと規定するいわば「等価のパラディグム化」によって、問題のアナロギアは可能となる。すなわちエミルにとって未知の者なるXに対するはロビンソンにとって金曜日に対するに等しいという比例関係にしたがって、ルソーのテキストは二つの系列の間に交叉をおこない、Xの位置に金曜日を代入するのである。

なおこのXの位置を教師の「私」が占めることはない。「私」はいわばその手前にいる。つまりエミルがもっと成長した後の時点—作品の「小説化」が著しくなる—においてならいざ知らず、この時点での「私」は独特のほとんど架空の、存在しないかのごとく存在する異様なステイタスの人物であって、ある意味でエミルとともにすでに社会を構成していながらエミルにとっての破局の契機となることはない。これまたもう一つの大胆すぎるがゆえに危なっかしいフィクションである。

さて、この原住民の青年はロビンソンの傍らにつかえていて、したがってすでに彼の役にたっている—すなわち彼においてすでに依存は始まっている—のであるが、心理的・精神的には（と理解すべきであろう）「あまり彼に関わりをもたない」（ne le touche guères）、とルソーは書いている。この素っ気ないごく僅かの語句による低い評価をデフォーの読者は訝るのではないだろうか。じっさい、確かに作品中での言及はそれほど多くないとはいえ、ルソーの意味での「小説」内に限るとしても、—その後でなら、なかんずくフランスの森林での熊や狼との戦いで素晴らしいパフォーマンスを披露する—、この人物はまず蛮人の首をことも無げに刎ぬる大胆な技量からはじめて、ロビンソンをはるかにしのぐ巧みなカヌーの操縦、また人食い族との戦闘においては、主人の指揮のもとに、西欧近代の武器の操作もふくめて一点の落ち度もなく果敢にたたかうのである。何よりイギリス人自身が青年の身体能力、知性、とりわけその絶対的な忠誠、服従、彼への信頼や懐き、さらには友情ないし愛情を、そしてまた改宗したキリスト教徒としての類をみない資質を（注釈 20）の引用参照）、スタロピンスキの有名な概念を借用すれば、男と自己とのあいだのまさに「透明性」<sup>52)</sup>をこの上なく評価しているのであるから。

しかし、生命を救い救われた結果として、生涯にわたる主従の関係、ほとんど奴隷と主人の関係に入ってしまった彼らについて、はたして友情とか愛情ということが語れるのかという疑問は生じる。ことに二者の関係についてのデフォーの用語が他方ではまた峻厳でもあることを我々は知っているからである。後にもみるが、一方の「絶対的な支配権」を有する「専制君主」「律法者」にたいして、他方は「臣下」（subject. 文字通り下に置かれたもの）にすぎないのである。逆転することも同等性へと変質することもない政治的な関係のなかで愛情やましてや真の友情が共存し得るのであるだろうか。とくにシニスムに冒されていなくとも明晰な現代人なら、これがしばしば支配者の側に属しもしくはそれに与する人々の陥る「啓蒙」の名をもつ善意の「人道主義」であることを知っている。より古くもあり新しくもある類似した、植民と被植民という一般性をもつ観点から問題を論じている『異国趣味と他性』の著者の指摘を参照しておこう。

ひとたび不平等な差異を認めたと、人は他の文化を愛したり嫌ったり、評価したり賞味したりすることはできる。ラス・カサスやカペロ・デ・ヴァカなどに植民主義の徹底的な攻撃者、服従したインディアンにとっての公平無私の擁護者を見る

という畏は大きい。好意的な感情というものとすれば、それは、征服という試練によって裏付けられた絶対的な優越性の下地を前提として発揮されるのである<sup>53)</sup>。

ロビンソンのケースは、集団にかかわる文化ではなく、ただ一人の青年個人を対象としているがゆえにより容易であり、ある意味でもっと油断ならざる事態であろう。

ルソーが指摘する主人公における無邪気でそれゆえに酷いこの無関心、換言すれば自民族中心主義ないし西欧中心主義、要するに人種差別は、例えばミシェル・トゥルニエの書いた「金曜日」の物語を読めば逆によくわかる<sup>54)</sup>。デフォーに発するそのメタフィクションにおいては、青年の出現は、原著の場合とは反対の意味で一両者の関係はある意味で逆転する一、またルソーの解釈とも違った意味で重大な転機となっている。

他方、同一化するようにエミルに勧められるロビンソンとはいかなる人物なのか。

## 2. 「臣下なき君主」の頹落

ルソーは、いくつかの作品においてこの人物に言及している<sup>55)</sup>。一ニヶ所に限ってそれを見てみよう。まず『エミル』と同じ年に公刊した『社会契約論』の中で、人祖について語りながらこの人物に思いを馳せる。

とにかく次のことは認めざるを得ない。アダムは、ロビンソンが彼の島のただ一人の住人である間その君主であったように、世界の君主であり、そしてその支配には好都合なことがあった。というのも王の座は保証されていて、反乱や戦争や陰謀家のことを恐れる必要はなかったことである<sup>56)</sup>。

確かにロビンソンは君主 (Souverain)、臣下なき君主であった。従って王権は保証されていた。ここでしばし立ち止まって、その解釈であるかぎりにおいてテキスト間関係を有するデフォーの二ヶ所との交叉読解を行うことによって、ルソーによる把握の見せる特徴を検証することができるだろう。まずロビンソンは家臣たち—じつは鸚鵡や犬や猫—にかしずかれて、堂々王者のごとく“like a king” 食事をとる自分の姿について諧謔をこめて語っている。彼は「臣下に対する絶対権」をもち、臣下のなかには「一人の謀反人」もいなかった、



と<sup>57)</sup>。確かに主人公が「ただ一人の住人」であったあいだに関してはルソーの真面目な指摘は誤ってはいない。

けれどもルソーが忘れていることもある。それは、ロビンソンはただ一人の住人でなくなった時点においても依然として自己を君主として把握する事実である。しかも彼は今度は生真面目に同じ資格を肯定するのである。というのも現地人青年の出現を契機として外世界との戦闘がはじまり、その結果主人公は「ただ一人の住人」ではなくなる。三人の食われるべき犠牲をはこんできた一群の蛮族たちを青年の協力のもとに殺傷し、二人（一人のスペイン人と一人の現地人。後者は金曜日の父親だと判明する）を助ける活劇につづく記述：

My island was now peopled, and I thought my self very rich in subjects; and it was a merry reflection (...), how like a king I look'd. First of all, the whole country was my own meer property; so that I had an undoubted right of dominion. 2dly, my people were perfectly subjected : I was absolute lord and lawgiver; they all owed their lives to me, and were ready to lay down their lives, if there had been occasion of it, for me.  
(D. Defoe, *op. cit.*, p. 203)

こうなると私の島はもはや無人島ではなく、人民が大勢できたという気持ちだった。王者然としている自分のようには考えただけでも嬉しいものだった。(…) 第一に、全領土がじつに私自身のものだった。したがって絶対的な支配権が私にあった。第二に、私の家来たちは完全に私に隷属していた。私は専制君主であり、また律法者であった。彼らが生きているのはみな私のおかげであり、したがって必要とあらば、いつでも私のために一命をなげうつ覚悟はできていた。  
(平井訳、185頁)

別の、更なる上位の権威のくだす裁可は無いものの、あるいはむしろ無いにもかかわらず、英国人青年は、他者に君臨する絶対君主として自己を規定するのである。この「絶対」(absolute)ということを見過してはなるまい。テクストは生殺与奪の権を連想させずにはおかない状況—臣民の側からの意志的な滅私の覚悟—を表現しているのである。そして« lord » と « subjects » との関係は、ここで単なる事実ではなく、何か必然的な当為をしめし、他の可能性を排除する概念をもって « right » 権利とされている。「undoubted」なる語はそのことに念をおして強調する。ちなみに « lawgiver » 「律法者」としてのロビンソンについては、先に言及した『金曜日もしくは野生の生活』においては、

ただ一人で暮らす主人公に六カ条からなる麗々しい名称の「Charte de l'Île de Speranza」(希望の島憲章)<sup>58)</sup>なるものを制定・「公布」させていることを思い出しておこう。「律法者」の行為のパロディ、ひいては古代ローマ以来の西欧における伝統の戯画である。

一見奇妙なのは、ルソーが君主としてのロビンソンについて「ただ一人の住人であった間は」という限定をつける事実であろう。『エミル』におけると同じように小説の後半を度外視しているのである。ロビンソンの自己把握に照らすならば、まずは要するに間違っただけの恣意的な条件であったと思われるだろう。けれども、ルソーの思想に即して考える限りにおいては、今や我々には納得できないことではない。というのも、たとえ主人公が「人民」(my people)ないし「家来」(subjects)を支配する絶対君主であることに変わりはないとしても、この時点で島はもはや、隔離され閉じられた至福の空間ではなくなっているからである。ロビンソンはすでにより大きな不可逆の社会化のプロセスの最中にあり、先の引用を思い出せば、すでに「物事の進展の中で、権利が暴力につき、自然が法に従うことになり」つつあるのである。支配は、今見たようにすでに「権利」とされているのである。

さらにルソーは、自分自身に起こったある出来事に際してデフォーの作品を思い出すこともあった。1769年11月から書き始められ、翌年末に完成したという『告白』第7巻<sup>59)</sup>の事例である。1743年の夏、大使館つきの秘書の職を得てヴェネツィアにむかう途中、メッシーナにおけるペストのためにジェノヴァの港で待機することを余儀なくされ、ただ一人の乗客として検疫所の中で過ごすことになるという話のなかで、ルソーは自分自身をデフォーの主人公になぞらえて、「再来したロビンソンのように「comme un nouveau Robinson」3週間のために、まるで一生涯のためであるかのように身辺を整えはじめた」<sup>60)</sup>と書いている。技芸の道具類の欠乏やとりわけ孤独ということが含意されているのであって、基本的に8年前の『エミル』での紹介に整合する連想である。

ところでロビンソンは単に君主であるにすぎなかったのか。そうではない。というのも彼は、権力だけではなく、武力と生産力—古代のインドやローマを経てフィンランドにおよぶ印欧諸民族の表象する社会機構について、デュメジルが執拗に提起し分析しつづけた必須の三大要因ないし職能<sup>61)</sup>—の全てを、一身に掌握し采配する例外的な特権者となっているのである。じっさいこれは同時に農夫・牧者であり、戦士・隊長であり、祭司あるいはむしろ宣教師も兼ねる支配者なのであった。

にもかかわらず、傍らにあって仕えているという事実によって、羊飼いは羊飼いである限りにおいて羊を必要とし、同じく君主は臣民を必要とするという意味で、「余りかかわりをもたない」はずの金曜日は不可欠のものとなり、それどころか彼だけでは十分ではなくなり、ロビンソン＝エミルにとって特定・不特定の多くの他人とともに生きざるを得ない状況到来の契機となることが暗示されているのである。脱自然化、社会化、集団への没入、本格的な意味での文化の誕生への動きである。けれども同類を必要とせざるを得ないという意味では依存と隷従へのプロセス、自律性喪失のプロセス、頹落、それが今にも作動しようとしているのである。

\*

小説の筋を参照しつつ若干の説明をくわえよう。ロビンソンは、自然界の事物や事象を相手として衣食住の条件をそして安全を確保することに努めてきたのであり、ルソーが評価するのはもっぱらこの段階での主人公の創意工夫、そして実行力である。もちろん、ロビンソンの生活は自己の生命の防御というかぎりでは首尾一貫してなおも後半部へと続いてゆく。しかし生活はもはや単に「自然的」ではなくなる。自己保存のための闘い（大前提）という点では変わらないものの、それから身を守るべき相手（小前提）が主として人つまり集団をなす人間たち、社会に変わるからである。

ところで、上の段落における筆者による物語の要約ないし解説に誤りがないとすれば、ロビンソンの生活のこの段階的な同時にしかし「質的な」展開は、ルソーの哲学における人類の弁証法的発展の図式に酷似していることに気付かないわけにはいくまい。比較のために、ルソーによる人間学の教義を三つの段階にまとめているある研究者の文章を援用しよう。（なおここで必要になるのは前の二つの段階である。第三段階は括弧に入れる）。

自然状態において人間はただ一つのタイプの関係しか知らない。事物類へのそれであって、それらは人に対して常に服属している。彼はそれらを使用する（身を養うために、身を守るために等）。社会状態においては事物への関係が依然として維持される一方、もうひとつ新たなタイプの関係も入ってくる。人間たちとのそれである。この重複が紛糾の源となる。（しかし理想の国においては...）<sup>62)</sup>

ルソーは自己の関心や構築してきた（もしくは構築してゆくことになる）人類史の図式に見事にこたえる類稀なケースを、デフォーの登場人物のうちに見出したのではないかという、筆者が先に示唆した仮説への一つの参考になり得る符合である。試みに、テキスト中の「人間」(l'homme)にかえて「ロビンソン」を、そして«l'état de nature»「自然状態」および«l'état de société»「社会状態」の代りにそれぞれ「金曜日の出現前」/「金曜日の出現後」を代入してみてほしい。文章は十分に有効であり続けることを承認できるのではないだろうか。こうしてロビンソンこそは、ルソーにとって歴史の少なくとも初期における人間を象徴するモデルケースと見なし得るものと理解され、『不平等論』の作者にとって（あるいは作者になるであろう人にとって）きわめて示唆に富む一大発見であったに違いないとあえて推断することができるのである。実際、人類のいわば代表としてロビンソンは、採集の、狩猟の、牧畜の、農業の、木工および建築の起源を、そしてヒトが辿ったとされるその「歴史的」経路 (parcours) の一つのモデルケースを見せてくれるのである。

これまで自然に対峙して飢えや乾き、寒暖や湿気などの困難を解決してきた男は、今や闖入してきた人々、敵となる一何故ならそれはすでに現実的に「彼の領地」である島を「無断で」(!) 侵犯し、なお潜在的には彼自身をも文字どおり餌食にしかねない一人間たちにかかわることになる。難破船から持ちかえっていた銃でこれを攻撃し、犠牲になりかけたこれまた食人種の青年を救助する。これは彼の下僕ないし奴隷となる。長いあいだ擬似「自然人」にならざるを得なかったイギリス人キリスト教徒における社会復帰、むしろ再社会化へのプロセスの開始である。だがそれだけではない。ロビンソンはれっきとした大英帝国の臣民の一人にもどるのである。彼は男に、そのもともとの名前が何であるかをいささかも自問することも本人に問うこともなく、犬猫や鸚鵡にならざらず奇妙な英語の単語で命名し、まっさきにパンツをはかせることから始めて—アダム・コムプレックスとでも呼ぼうか—「文明化」し、英語を教え、暗黙には大英帝国の国教に改宗させる。これを部下に従えて指揮しつつさらに蛮族の侵入を阻止するために戦う。これらすべては、殊に19世紀ヨーロッパの植民列強の国策に先駆けてこれを予感させる象徴的な行為である。こうして主人公の生活は、異人の出現とともに、みずから支配する他人あるいは彼に敵対する他人と「一緒の」生活（共生）、ルソーの用語では「社会的な」ものへと紡うことなく変質せざるを得なくなるのである。

デフォーの作品を論じながら、ルソーが少年エミルの成長の段階との関連で

ロビンソンの孤島での生活のみを、さらにはその前半のみの意義に注目することをみた。あたかも金曜日の出現以降のこともまた事実上「がらくた」でもあったかのように。じっさいには、儂い願望であるにせよ、その到来の時期をできることなら遅らせて—デリダ風にいえば一種の« *différance* » (引き延ばし、遅延) の願望であろうか<sup>63)</sup>—、いや遅らせることなどできない「歴史の必然」であるからして、その間エミル＝ロビンソンには充実したまさに「至福」の生活を満喫するがままにさせてやりたい、というのである。たとえ虚構の助けを借りてでも、たとえ虚構の中での夢にすぎないとしても。

### 結論：停止の夢想

金曜日に言及する先の引用文は、『不平等論』の「序」を終えつつ、個人と人類とにおける不可避の進展という展望の中で著者が表明したノスタルジーに比較することができる。ルソーはこう書いている。

私は、個人としての人間ができることなら止まっていたいと望むような (*voudroit s'arrêter*) 年齢があると感じている。人類がとどまっていたらよかったのに、と君の願うような (*désirerois*) 時代を探してほしい。現状に不満で、—それは不幸な後世にさらにもっと大きな不満の種を予告している数々の理由のためなのだが—、もしかしたら君は後戻りできたらと願うかもしれない (*voudrois*)。そしてその感情は君の最初の祖先たちをたたえ、君の同時代者たちをとがめ、不幸なことに君の後から生きることになる人々を怖れさせるに違いない<sup>64)</sup>。

このテキストはそこにこそ「止まっていたい」あるいは「いたかった」という過ぎ去ってしまった例外的な時期・事態を語っている。そしてもう一方の場合には、過ぎ去ることになるまさにその例外的な時に、そこに「急いで住ませましょう」と言う。つまりその状態に移してそこに「とどませよう」とする。同じく類まれな事態である。ところで『不平等論』では個人とともに同時に人類にとっての幸せの時期が問われていた。ということは、エミルの移転あるいは移住は、実は人類の歴史の一端を示唆せずにはおかないモデルケース、不幸な人類にとっての模範的な例、一種仮想的な象徴であったことを暗示するのではないだろうか。

曖昧の余地が全く無いわけではない。というのも、唯一称賛的となるのが「最初の祖先」(tes premiers ayeux)と言われるからには、これがまた人類にとって留まるべき時代であった、と思いきも短絡に読者は誘われるかもしれないからである。いやエミルのケースが虚構の読みに触発された文学作品の中への感情移入、移転のシミュレーションであるように、同じ単語 « âge » で表される個人の「年齢」に類比する人類の「時代」に関しても、不可避・不可逆の進行の途上で自己と人類とをふりかえる人に勧められるところの、回顧的であるがゆえにそもそも実現不可能な夢にすぎないのである。そのことはこの言説の基調をなす叙法が非現実を対象とする願望の条件法であるという事実によって明らかである。「自然に帰れ」は誰が何を根拠に言い始めたのかはいざ知らず、長きにわたってルソーの名前とともに文学や哲学、社会思想や教育学の世界を支配してきたスローガンであるから、今やそれを繰り返す発言は見られないと思われるけれども、我われはここで念のために二つの反証をあげておこう。

まずは何よりも「序文」中の、先に参照した人間認識の必要と困難を述べる原理的な周知のテキスト(本稿(1)の注釈35)の引用参照)を忘れてはならない。自然状態とは、過去、現在、未来にわたって仮設的な性格をもつ観念であり、現状を正しく見るために必要不可欠な判断の基準として措定されるひとつの要請であった。もしかしたらなお誤解のリスクを恐れたのか、著者は、同書のある長い注釈中の、印刷の途中で出版業者におくって追加したという段落においても論戦の反語法による辛辣な挑発を投げかける。

なんだった？もろもろの社会を破壊し、お前のもの俺のものを根絶し、森林にもどって熊と一緒に生きなければならないのか。これは私に敵対する人々の流儀による結論である。この結論を私は未然にさまたげたくもあるが、彼らがそれを引きだす不名誉は邪魔したくない。お前さんたちには天の声は聞こえなかったのだ！(…)お前さんたち次第なのだから、太古の最初の無邪気さを取りもどして下さい。森のなかに行って、同時代者たちの犯罪を見たり記憶したりしないために、人類の悪徳をすてるために、その知識を放棄なさるがよい。こうして怖れずに人類に品位を落とさせなさい<sup>65)</sup>。

この箇所については、ジャン・スタロピンスキの注釈を引用するのが適当であろう。すなわち、

これ以上明確に自然への実際の回帰の企てを挫くことは不可能である。たとえ知識の進歩が道徳的な墮落をともなってきたことを認めなければならないとしても、後戻りすることは品位の喪失 (avilissement) でしかあり得ないのである。ルソーの説はあまりにもしばしば彼に帰せられた「自然への回帰」を含意しない<sup>60</sup>。

しかし批評家が続けて「それはより正確には社会生活の最中においての、失われた自然 (la nature perdue) への遠くからの忠実さと定式化されるのではないか」と書くとき、筆者としては「失われた自然」なる表現への疑問はともかくとして、むしろそれよりは同じ学者がもっと前の注釈で書いている「ルソーはしばしば時間の停止という実現不可能な願望を書きつける」<sup>67</sup> という指摘に賛同して、ルソーのロビンソン解釈という端的な問題にかんして次の三ヶ条をもって結論としたい。1) 『エミル』におけるはかない至福状態への移住の要請は、『不平等論』における個人と社会の双方に示唆されるところのある時期での停止の夢想に類比すること、2) ロビンソンの島とは、この仕合わせな停止、幸せの中で停止するひとつの空想例、図絵であり、ロビンソンを夢見てこれに同一化するとは、この至福を虚構的に実現する願いに他ならないこと、3) それを反文学の文学者ルソーは、文学作品に他ならないデフォーの小説の読解において暗示した、ということである。

## 付録：ロビンソンの肖像

『ロビンソン・クルーソー』の昔の仏訳本のいくつかを紹介する。文字は図像ほどにものを言い得ると信ずる者の愛書家に寄せる文献・図像記述 (Notice biblio-iconographique) の試みである。以下いくつかの限定を設けることをご了承願う。

- ①主人公の無人島での生活の物語 (ルソーのいわゆる「小説」) を中心とする『ロビンソン』第一巻にかぎり、
- ②フランス国立図書館 (BnF) 所収の、
- ③『エミル』出版に先立つ仏訳本—それはデフォーの原著 (1719年) に続いて1721年には (筆者は1720年という主張には疑問無しとしない) すでに出現しはじめの一のうち、
- ④テキストに図版をそえた版についての

調査の報告である。無論それによってルソーの用いた版が必ずしも特定できるわけではない。

以下の列挙において、冒頭の通し番号とそれにつづく出版年の記載は筆者による。タイトル・ページの記載（1°、4°）においては、斜字体の介在、大文字と小文字の使い分け、そして用いられたアクセント符号とともに綴字をそのまま復元するが、その行分けによる文字の配置、文字ポイントの異同、同じく黒と朱とをもちいた文字の色分けについてはこれを遵守しないこと、次いで図像記述においては、描線の濃淡ないし粗密の指摘・分別はこれを試みないこと、そして何より筆者のもちいる「左」/「右」なる語は、読者の目にとってではなく、（別旨の記載をしない限り）読者の方に身体と顔を向けて立っている図像中のただ一人の人物にとってであることを明記しておく。

### 1° : 1722 (–1723) 年版

LA VIE ET LES AVANTURES SURPRENANTES DE ROBINSON CRUSOE,  
Contenant entre autres évenemens le séjour qu'il a fait pendant vingt-huit ans dans une Isle déserte, située sur la Côte de l'Amérique, près l'embouchure de la grande Riviere Oronoque; son retour dans son Isle, & ses autres nouveaux Voyages.

*Le tout écrit par lui-même. TRADUIT DE L'ANGLAIS. TOME PREMIER.*

A AMSTERDAM. Chez L'HONORÉ ET CHATELAIN. M. DCC. XXII.

もちろん12折版（2°以下についても同じ）の三巻本第一巻第一部（すなわちテキストは二部構成。この点でも2°以下同様である）のタイトル・ページである。そこには続篇第二巻の内容もごく短い文で入っている。すなわち「彼の自分の島への帰還...」である。因みに上の記載は、筆者が見た BnF 所収になる最も古い仏訳本である同じ書店出版の図版のない 1721 年版とほぼ同じである。ただしそこには「son retour...」につづく内容の記載はなく、若干のアクセント符号の有無などに違いがみられる。なお「Avantures」の綴字«-van-»は以下 4°に至るまで変わらない。興味深いのは、「全て本人が書いた」とするイタリック体での提示である。こうして R. クルソーが著者とされ、デフォーの名は抹消されたのである。言い換えれば、一人称のフィクションはこうしていわば自叙伝として紹介されたのである。翻訳者名もない。（現代のインターネット上の目録では上述の 1721 年版から以下 4°にいたるまで、翻訳者とし



て Thémiseuil de Saint-Hyacinthe および J. Van Effen なる名前を挙げている)。この第一分冊の本文は389頁。なおこれには M. DCC. XXIIIの年代をもつ Tome Second (第二巻) がつづく。

ところで、タイトル・ページに先立ちこれと見開きに、予告もいかなる指示も無しに一枚のもちろん白黒の口絵 (frontispice) がおかれている (図版1)。そして下の欄外に ROBINSON CRUSOE なる記載がある。



図版 1

BnF所蔵

それは画面中央に手前をつまり読者の方を向いて立つ一人の男性の肖像である。裸足ではあるが裸体ではない。ということはそれがすでに人間でありかつ文明人であることを含意する。男は右足をやや前にだして身体を少し（正面に対する後ろ向きを180°とすればそのほぼ4分の1（45°）ちかく）左斜めにねじっている。けれども顔は正面よりに向いている。その姿は口の両側に長く垂れさがる鬚、小さな縁のついた挿鉢（より鋭角の）を逆さにしたような被り物、植物の細い蔓が密集するかのよう垂れ下がる蓑を思わせる獣皮の上着（しかし、野生の山羊の皮はこのように密集した剛毛をもつのだろうか）、下肢にも二股に分かれ脛までくる同様の佩物、背には負籠、柄の下方3分の1あたりを右手でつかんだ巨大で頑丈そうな日傘、左手で銃床をにぎり肩にかついだ長い鉄砲、腰の右側にはベルトに鋸（先端に向かってやや反りを見せつつ幅が狭くなり、やや丸みを帯びた下側の辺全体に規則的なギザギザの歯がある）を差している。もちろん人物の身体の捻りのおかげでこのかなり大きな長い鋸の十分な描出は可能になったのである。同じくベルトの右側の腰につけた二つの袋。これは鋸の太い部分にかぶさっている。さらに男の右背景におだやかに波打つ海。そして岩。左側の背後には材木と灌木の混じった垣根もしくは障壁、その奥に住処。前景の右足の右側には枠外に消えてゆく木の幹、左足の前にわずかの草。草むらの彼方、人物の左足と障壁のほぼ中央の地面に、フランスにおいてはエグゾチックな生き物である一匹の亀。それは読者から見て右の枠外の方に頭を向けて腹這っている。遠景には水平線がくっきりとほぼ5分の3の高さで画面を分かち、広大さを暗示する空には雲の形も鮮やかに見える。

下線部はルソーによるロビンソンの姿の描写に現れない要素であるが、比較によって、さらに明らかな差異を指摘することができる。ルソーのロビンソンの像には、図像学でいわゆる「attribut」（人物の同定を可能にする象徴あるいは寓意表象をになう持ち物あるいは付属物）のうち、鋸と籠との不在のために作りかつ運ぶという機能が完全に欠けている。すなわち大工仕事（垣根、住居、家具、調度、カヌーなどの作成...）および農作業（草、土、石ころ、収穫物、その他の運搬、そして貯蔵...）にとって必須の基本的な要因である。そこにはまさに Homo faber が不在なのである。政治経済や教育の場面であれほど農業の意義を説く人の理念に対して一雄弁な一例を引用する—

あらゆる技芸のうち第一にして最も尊敬さるべきは農業である。私は鍛冶を第二の位置におく。木工は第三に、そして以下に続く<sup>1)</sup>。

いささか逆説になるが、それはジャン＝ジャックの若年の時期における農作業や工作（特に木工）体験の有無と無関係なのであろうか。同じくマスケット銃の欠落によって、こちらはより納得しやすいが、狩人の機能も語ることはできない。ルソーも挙げる獣皮はむしろ牧者であることを意味する。欠如は部分的にはルソーによる「技芸の道具なし」との命題に應えるものである。

なお、この図版の作家名は次に図版2°において判明する。

## 2° : 1727年版

タイトル・ページは、商標の上に「第3版」なる記載が入り、書店が Chez ZACHARIE CHATELAINへと部分的に変わり、タイトルにおいて« entre autres » の« entr'autres » への、« prés » の« près » への変更、そして« son retour... » につづく続編の内容予告の消去にくわえて、年代を M. DCC. XXVII としている以外は1°に同じ。つまりこれは1721年版（初版）および上に紹介した1722年版（第二版）に続く重版なのである。分冊なしの第一巻629頁。



図版2

BnF所蔵

口絵（図版 2）には「同じ」図版が復刻されている。ただし奇妙なことに、印刷時における工夫なのかそれとも第二版（1°）の印刷において生じた事故の修復なのか、それは 1° に対して全体として裏返しになり、左右がそっくり逆転している。加えて、書物の制作という観点からして図版の導入によって改良を見せた第二版をふまえて、この版はさらに飛躍的な進化をとげている。

まず第一に、図版の作者名が欄内の、しかし読者から見て左下方の隅に実際の 12 折版でも見落としがちなほど微細な文字のラテン語で « B. Picart. del. sculp. direxit 1720. » と明記されているのである。すなわち B. (ベルナル)・ピカルなる彫物師が描き (delineavit)、彫り (sculpsit)、指揮した、というのである。左右逆転した図版の「同一性」に鑑み、すでに先の 1° においても同じ作家 (1673–1733)<sup>2)</sup> の 1720 年に制作したという図版が用いられたことが判明する。なおこの図像の年代を根拠にして最初の翻訳書もまた 1720 年に日の目をみたと断定するのは早計であろう。

第二に、この版には、タイトル・ページに何の指示もなしにさらに二重の工夫が入ってくる。すなわち、

1. 「序文」とそれにつづく本文との間に、世界地図 (Mappe-Monde ou Carte générale de la Terre) が 2 頁大の折り込みで挿入されている。それは二個の大きな円を描き、メルカトルを初めとする様々の世界地図とは逆に、左の円の中に新大陸を右に旧世界を表象していて、そこに「ロビンソンの旅」の経路を描いているのである。

2. 本文のあちこちに都合 6 枚の挿絵が入っている。それぞれの箇所と標題を記載すれば、

- a) 「あらゆる種類の (toute sortes なる 誤植) 不幸を予言する父親の前のロビンソン」 (p. 2 / 3)
- b) 「ロビンソンの難破。彼は無人島に放りだされる」 (p. 100 / 101)
- c) 「ロビンソンの夢と改心」 (p. 216 / 217)
- d) 「その解放の後、ロビンソンの足許にひれ伏す野蛮人」 (p. 434 / 435)
- e) 「野蛮人たちとの戦闘。一人のエスパーニャ人の解放」 (p. 490 / 491)
- f) 「ロビンソンは乗船し、28 年以上住んだ島を去る」 (p. 568 / 569)

a) を除けば、いずれもルソーのいわゆる「小説」の場面である。ただ e) はなぜかフライデイの父親もまたその時に救助されることを省いている。ところで、これらの図版はすべて物語の要するに「劇的な」事件の視覚化をこととしており、「奇妙で驚くべき冒険」「主題の多様性」を主張していたデフォーに

同調して、いわば「活劇」の要素を誇示しているのである。ルソーの読みがどれほど異質のものであったかが分かる。

### 3° : 1743年版

扉での記載は第4版に変わり、タイトルの記載における若干の綴字や綴字符号の変更 (entre autres, Ile, Amérique, Rivière) および句読点 (virgule) 一個の移動、そして年代が M. DCC. XLIIIとなる以外は図版 1° および 2° に同じ。口絵についても 2° からの変更は無い。

さらに世界地図も6枚の図絵 (2°の最初の挿絵のキャプションの誤植 « toute sortes » をふくめて) もまったく変わらず、かつ同じ 629 頁の本文中の同じ個所にそれぞれ復刻されている。以上の事実より、本文についても、2° に対する僅かの微修正の可能性がまったくは排除できないとしても、まず同一テキストの復刻であると推断することができる。こうして、アムステルダムと同じ書店から出る翻訳書は、いわばその「成長」を1727年の第3版において完了していたということができる。

最後に、『エミル』印刷開始の年にパリで出版された別の版をあげる。ふたたびタイトル・ページを転記する。

### 4° : 1761年版

LA VIE ET LES AVANTURES SURPRENANTES DE ROBINSON CRUSOÉ,  
CONTENANT son retour dans son Isle, ses autres nouveaux Voyages & ses Réflexions.  
TRADUIT DE L'ANGLAIS. TOME PREMIER, I. PARTIE. Nouvelle Edition, avec  
Figures.

A PARIS, chez CAILLEAU (...), DUFOR (...), CUISSART (...). M. DCC. LXI.  
AVEC PRIVILEGE DU ROI.

タイトル・ページの文字は以上に尽きる。ここでは三書店それぞれの住所は省略している。アムステルダムからの諸版に比べて全体として省略ないし短縮が目立つ。じっさい標題にはルソーのいわゆる「小説」つまり孤島での生活への明示的な指示はないのである。それは大文字で表記されたタイトル冒頭の節によって含意されているのであろう。第3巻 « Réflexions » が予告されるが、「すべて本人が書いた」という指摘は消える。作者名も翻訳者名も依然として記載

されていない。「国王の允可状」の明記は言うまでもない。注目すべきは、ここで初めて«avec Figures»なる記載が入ることである。「挿絵」のみならず「口絵」をも含意する語として「図版つき」ないし「図像つき」と訳するのが適当であろう。そのことはしかし、『エミル』文中における同じ語の意味の確定によって影響をもつものではない。その点では、リファテルのいわゆる「巨大文脈」が参考にならない以上、ごく貧弱な「微小文脈」あるいはソシュールのいわゆる「連辞」<sup>3)</sup>を決め手とせざるを得ないからである。



図版3

BnF所蔵

さて、この頁と見開きに無署名の同じく白黒の口絵が見られ（図版3）、その上部余白に「狩にでるロビンソン。第2部 217頁に彼の衣装の描写を見よ」という説明を読むことができる。下には「Frontispice」なる記載が第一巻第一部なる指示とともに見出される。この人物像は、ピカールのそれに似てはいるもののそれとは別で、そこにも顕著な細部の簡略化が見られる。男は右足をかなり後ろに引いて立っている。山羊か馬かなんぞのそれを思わせる長く細い骨ばった二本の足。口の両側に左右に垂れた髭。獣皮の衣、同じく被り物、背には籠、柄の中央を右手でにぎった大きな日傘、左手には銃床をつかみ肩にかついだ鉄砲、右の腰には先端に向かって次第に細くなる鋸。これは小さくて細身なため抜身の短剣と見誤りかねないが、目を凝らせば下側にならんだギザギザがあることが分かり判別はつく。しかしロビンソンは、この程度のちっぽけな道具でカヌーや板材を作るための大木を伐採できただろうか。（下線はルソーの記述にも現れる要素）。右背景には高い樹林、その手前に密集した柵。左には木立の遠景。砦や住処はない。前景には左足の左側に切株、右足の前には厚ぼったい葉をもつ小さな植物。傘の左上に雲はあるが、海は見えない。亀もない。全体として文字通りにも比喩的にも「線が細く」、あえて印象を述べれば、これはアムステルダム版の明らかな模倣かと思われるけれども、違いを見せなければならぬことが細部の省略をうながし、よって重厚さあるいは迫力に欠ける結果になったかと思われる。あるいはむしろ単に図像作者の力量の差異を指摘すれば十分なのであろうか。

「図像つき」と明記するように、本文中に図版も入る。「ロビンソン・クルソーによる序文」およびまた一つの「序文」に続く本文は、ここでも二部構成（pp. 1-192 / pp. 193-398）である。図版は各部分に3枚ずつ以下のように配置されている。なおタイトルないしキャプションは画面の上部余白に記載され、それぞれに口絵の場合と同じようにテキストでの箇所も明記されている。これは省く。

- a) 「ロビンソンは、乗船することで出会うことになる様々の危険について父親の戒めを受けている」（p. viii / p. 1）
- b) 「ロビンソンは遭遇した大きな危険から救われたことで天に感謝している」（p. 64 / 65）
- c) 「ロビンソンは聖書のうちに読んだばかりの言葉に慰めを見出している」（p. 136 / 137）
- d) 「ロビンソンは一人の野蕃人の命を救い、これは感謝のあまり彼の奴隷

となる」(p. 274 / 275)

e) 「ロビンソンはロンドンに行くために彼の島から出る。彼は金曜日と鸚鵡とを連れて行く (p. 360 / 361)

f) 金曜日がロビンソンの案内人を大きな危険から救う」(p. 378 / 379)

全体として、口絵のロビンソンの肖像についてと同じように、挿絵についてもアムステルダム版と関係する物語内容においてほぼ同じか、でなければそれにすぐ連結した事件を少し変えつつ描いている。もっとも2°のe)の対応物はここに無く、逆に4°のf)の対応物は2°には無い。なお双方のd)は呼応しあうが、4°では蛮人を「奴隷となる」« se fait son esclave »と断定している。以上アムステル版とパリ版とのあいだに確認した類似と若干の差異は、後者における前者を参考にしつつ模倣ではないと見せかけるための配慮によって説明できるのではないかと思われる。いずれにせよこれら二種類の刊本は、前者が後者にとってすでにそうであったであろうように、後世次々に出版されていく図版入り本にとっての模範、少なくとも参照事項となるのであろう<sup>4)</sup>。

最後に、パリ版でも物語を分節する劇的な出来事を選んで図像に翻訳していることに変わりはない。具体的にはロビンソンの信仰の強調(b, c)、また「小説」以前および以後への参照(a, f)、そして金曜日の相対的重視(d, e, f)は明らかである。いずれも原著者の意向をくんだ読者への働きかけであることは言うまでもないが、それはルソーが作品において読みとりあるいは読み取りたかった事態とは全く異質の要因であることを再度確認することができる。ここでは金曜日の場合も、行動ないし事件の要素として重要であるにすぎないのである。

以上をもって「文献・図像記述」の注釈とする。

謝辞：本稿(1)(2)および付録の作成にあたり、BnFはもちろん山口大学および西南学院大学図書館の司書諸兄諸姉の御配慮を、文献情報に関しては山下高之氏のお世話をいただいた。また本稿および付録は部分的には『『百科全書』と18世紀研究会』(2012年7月21日、慶應義塾大学)にて発表する機会を与えられた。記して感謝申し上げる。

(すえまつ ひさし 九州大学名誉教授)



## 注 釈

- 43) 本稿 (1) の項目は以下の通り。はじめに / 問題設定 / ルソーの「改釈」 / 1. 「芸の道具」 / 2. 信仰への復帰 / 3. 金曜日の隠蔽? / 結果の理由 / 啓示を括弧に入れる (『山口大学哲学研究』第十九巻、2012年3月、pp. 1-27所収)。本稿 (2) はこれに続く。
- 44) Rousseau, *Émile ou de l'éducation* (1761), L. III, *Œuvres Complète*, t. IV, Gallimard, « La Pléiade », p. 455. 強調点筆者。
- 45) ロビンソンの日常での肖像は例えば次の箇所に見ることができる。Defoe, *The Life and Strange Surprizing Adventures of Robinson Crusoe, of York, Mariner* (1719), Oxford university Press (1906), “Everyman’s Library”, 1992, pp. 125-126 ; 平井正穂訳、集英社、「世界文学全集」6、昭和50年、117頁。「*équipage*」の意味の確定を含む『エミル』のこの箇所の読みについては、九州フランス文学会『フランス文学論集』、N° 48 (2013) に発表予定の拙論「ロビンソンの肖像—デフォーおよびルソーの場合—」を参照されたい。
- 46) *Le Petit Robert*, Nouvelle Éd., 1979, p. 780. 外国文学の研究者にとって必ずしも自信のもてない「語感」を代補するために、いわゆるネイティヴの識者に質すこともできよう。なお『エミル』の刊行に先立つ仏訳書の図版については、本稿末尾の付録ノート参照。
- 47) Rousseau, « EXPLICATION DES FIGURES », dans *Émile ou de l'éducation*, *op. cit.*, p. 869.
- 48) P. Burgelin, « Notes et Variantes » de l'*Émile*, *op. cit.*, p. 1430.
- 49) Rousseau, *Émile*, L. III, *op. cit.*, p. 456. 原文の斜字体は鉤括弧で表記。
- 50) Rousseau, *Émile*, L. II, *op. cit.*, p. 422. Voir aussi *Émile et Sophie ou les solitaires* (1780), « Lettre Première », *O. C.*, t. IV, *op. cit.*, p. 882.
- 51) Aristote, *La Poétique*, 1457 b 22-25. Texte et trad. fr. par J. Hardy, Les Belles Lettres, 1964, p. 62 ; Texte et trad. fr. par R. Dupont-Roc et J. Lallot, Seuil, 1980, pp. 108-109.
- 52) Cf. J. Starobinski, *Jean-Jacques Rousseau : La transparence et l'obstacle*, Gallimard, 1971, *passim*.
- 53) F. Afférgan, *Exotisme et altérité : Essai sur les fondements d'une critique de l'anthropologie*, P. U. F., 1987, pp. 114-115.
- 54) Cf. M. Tournier, *Vendredi ou la vie sauvage* (1971), Gallimard, « folio junior », 1984.
- 55) とはいえ、プレイヤッド版 (I-V, 1959-1995) 各巻の索引および R. A. Leigh 編になるルソー書簡集全52巻のそれに依拠する調査によって、ルソーは『エミル』および『社会契約論』より前に『ロビンソン』の痕跡を残してはいないと思われた。か

つて（少年期における読みの具体的な証拠をあげることなしに）ジョルジュ・ピールが提起した、若年のジャン＝ジャックがこの作品を読み、その影響のもとに諸作品を書くことになったのみならず、その人生をも方向づけられたとする仮説（拙論（1）、注釈4）を支持することは筆者には困難である。

- 56) Rousseau, *Du Contrat social* (1762), L. I, ch. II, dans les *Œuvres Complètes*, t. III, Gallimard, « La Pléiade », 1964, p. 354.
- 57) Defoe, *op. cit.*, p. 124; 上掲平井訳、116頁。
- 58) M. Tournier, *op. cit.*, pp. 37-39. もちろんこのイタリア語での呼称は、デフォーのロビンソンが島を当初 “Island of Despair” と呼んだこと（「日記」の冒頭, p. 58; 55頁）への応答である。
- 59) Voir A.-M. Pfister, « Chronologie de J.-J. Rousseau », *Œuvres Complètes*, t. I, Gallimard, « La Pléiade », 1959, p. cxv.
- 60) Rousseau, *Les Confessions*, dans les *O. C.*, t. I, *op. cit.*, p. 296.
- 61) Cf. G. Dumézil, *Mythe et Épopée*, I, II, III (1968-1986), Gallimard, « Quarto », 1995, *passim*.
- 62) Tz. Todorov, *Frêle bonheur : Essai sur Rousseau*, Hachette, « Textes du XX<sup>e</sup> siècle », 1985, p. 32.
- 63) Cf. J. Derrida, *De la Grammatologie*, Ed. de Minuit, 1967.
- 64) Rousseau, *Discours sur l'origine et les fondemens de l'inégalité parmi les hommes*, *O. C.*, t. III, *op. cit.*, p. 133.
- 65) Rousseau, *Discours sur l'inégalité*, « Notes IX », *O. C.*, t. III, *op. cit.*, p. 207.
- 66) J. Starobinski, « Notes et Variantes » du *Discours...*, *O. C.*, t. III, *op. cit.*, p. 1367.
- 67) J. Starobinski, « Notes et Variantes » du *Discours...*, *O. C.*, t. III, *op. cit.*, p. 1304.

#### 付録

- 1) Rousseau, *Emile*, *op. cit.*, L. III, p. 460. Cf. *Projet de Constitution pour la Corse* (1861), *O. C.*, III, *op. cit.*, p. 904.
- 2) この美術家の生涯と作品の概略については « Picart, French family of artists », *The Dictionary of Art*, Ed. J. Turner, vol. 24, Grove, 1996, p. 712 参照。
- 3) Voir M. Riffaterre, *Essais de stylistique structurale*, trad. fr. par D. Delas, Flammarion, 1971, pp. 64-94; F. de Saussure, *Cours de linguistique générale*, Payot, 1972, pp. 170 et sq.
- 4) 上述のピカールについてリーズ・アンドリーズはこう紹介している。「最初のフランス語訳の口絵は1720年に遡る（Le frontispice de la première traduction française date de 1720）。それは、この版が出版されるアムステルダム（à Amsterdam où cette édition

paraît) で活躍していた才能豊かなフランス人芸術家、ベルナール・ピカールによって彫られている。この口絵はデフォーがその人物について描いている肖像に英国の版画よりももっと忠実なのであるが、以後 19 および 20 世紀における大部分の再版にとってモデルとなるであろう。(…) ロビンソンはこうして真の伝説に入るのである。」(L. Andries, « Les images et les choses dans *Robinson et les robinsonnades* », in *Études françaises*, vol. 35, n° 1, Presses de l'Université de Montréal, 1999, p. 101 (拙論(1)、注釈 4) 参照)。ただし最初の仏訳の年代が 1720年に遡るという命題は、先に見たように作者のピカール自身は1727年版において確かに1720なる年代を記載してはいるのだが—それを翻訳出版の年代であると単純に解してよいのだろうか—、筆者には少なくとも BnF 所蔵の書物では追認できなかった。